

過去と未来をつなぐ市民のための交流の広場

-(仮称)国際センター駅北地区複合施設- 実施方針

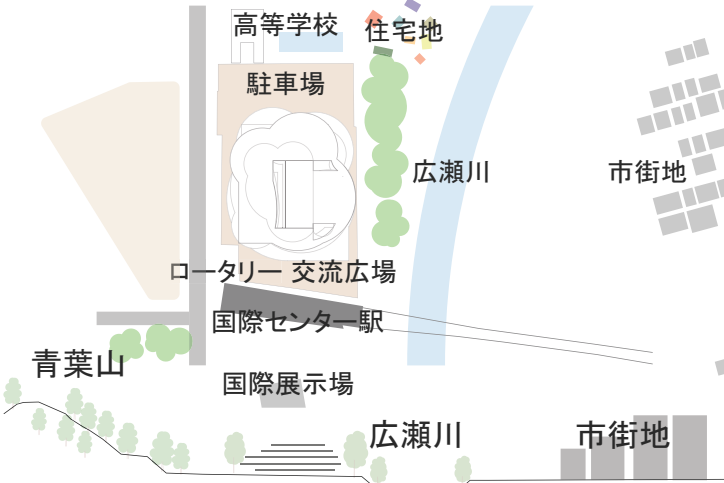
設計の理念と考え・設計を進める上で特に留意すること / コスト縮減に関する提案・将来の大規模改修を想定した設計上の配慮

1 周辺環境と連続する開かれた公園のような建物

豊かな周囲とつながり、人々の活動や、何気ない日常の体験、過去と未来をつなげるような空間を作り出します。「杜の都」の名の由来となった青葉山エリアに、緑あふれる公園のような環境を作り出します。

1-1 敷地中央に緩やかな平面を配置し、周囲に威圧感を与えない

南は駅と連続する広場、北に駐車場を取り、建物外形も大きな立面を作らないことで、周辺から適度に引き取り、威圧感を与えない構えとします。



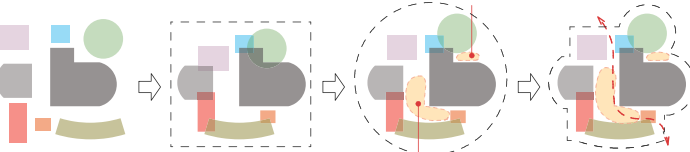
1-2 フライタワーを突出させない5層の建物

建物を5層に積層することで、階ごとに違った空間体験を生み出すとともに、フライタワーだけが突出した大きな立面として現れず、周辺の緑や山並みと呼吸するような外観としています。



1-3 活動と呼吸した色々形の空間の積層

各階に配置されるプログラムに適した形状のエリアをつくり、それらを集めて各階スラブの形を決定します。様々な形のスラブが積み重なり、内外にいろいろな隙間空間を作り出します。内部ではそこにトップライトからの光が落ち、外部では異なるかたちの軒下空間がうまれます。室内の活動が自然と溢れ出すことで、大きな彫刻的な外観を作らず、人々の活動そのものが外観となります。

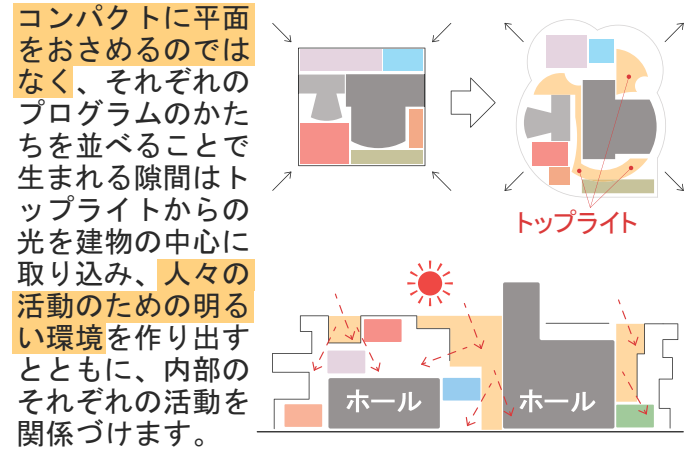


1-4 市民のための空間を低層部に固める

各エリアを横断して、市民のための空間を1-2Fの大きな吹き抜けの空間の中に配置し、建物を訪れた人々が一体的に場の雰囲気を感じられるように配慮します。

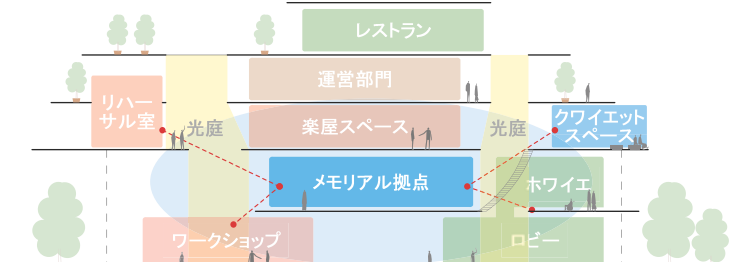


1-5 2つのホールを独立させ、光庭をつくり建物内に明るい環境をつくる



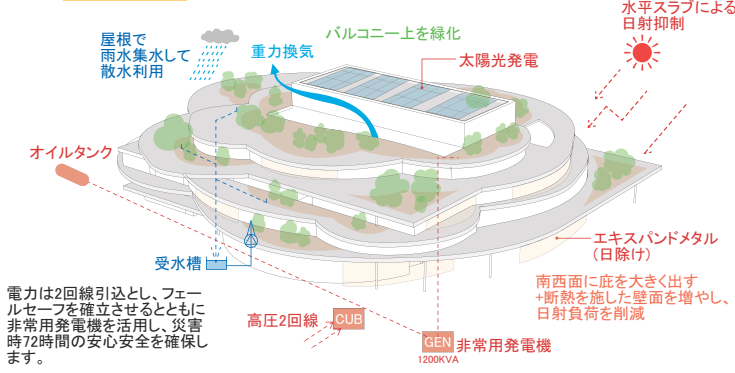
1-6 震災の記憶を日常に隣接させる

中心部震災メモリアル拠点を2Fに配置し、吹抜を介して建物の多くの場所から存在が感じられるようにします。



1-7 太陽、風、雨など自然エネルギーを活用

- ・フライタワー屋上にソーラーパネルを設置し、省エネルギーに寄与します。
- ・雨水を貯留し中水を緑化散水やトイレの洗浄水に活用します。
- ・緑化された段々のスラブによる日陰を作り出し、建物内部への熱負荷を削減、各階のバルコニーの緑に散水することで周辺へ涼しい風をもたらします。
- ・トップライトから自然光を取り込み、明るい室内を実現します。昼光センサーと連動させて十分な照度を少ないエネルギーで確保します。
- ・中間期の非公演時にはトップライトを開放することで重力換気を行います。



2 多様な公演を可能にするホール

2つのホールを同レベル・向かい合わせに配置し、それぞれの独立性を確保しつつ、周囲の空間を巻き込んだ多様な使われ方を目指します。

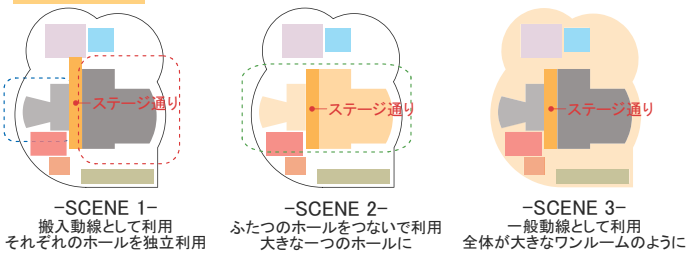
2-1 ステージ通りを作る

大ホールと小ホールを向かい合わせで配置し、2つのステージの間に幅広の「ステージ通り」を計画します。トップライトから光が落ち、建物の中央ながらも明るく開放的な空間となります。十分な幅を持っていることでそれぞれのホールが別の公演を行っていてもお互いに影響を受けることなく利用が可能です。



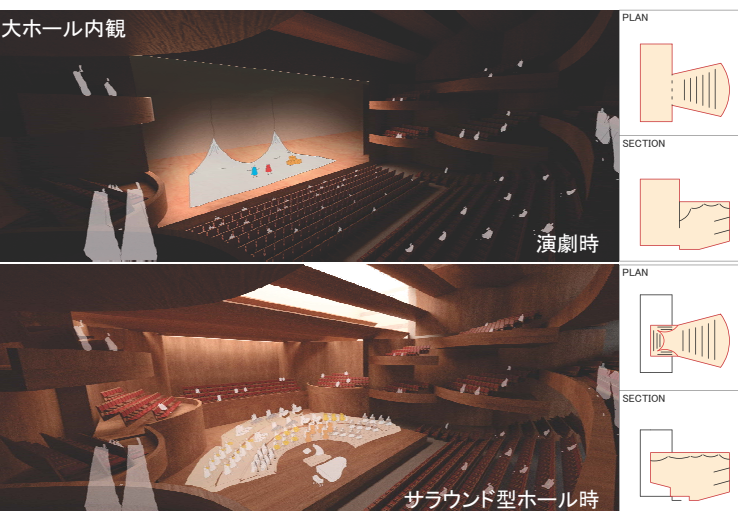
2-2 ステージ通りとつながるホール

小ホールの背面を大きく開放することで、小ホールとステージ通り、ホワイエを一体的に利用したお祭りやイベントをすることも可能になります。大小それぞれの舞台裏を開放することができ、それによって2つのホール、ロビー、ワークショップスタジオなど、建物の外側をも一体的に使うような、新しい大規模イベントも可能です。



2-3 ホール内部の機構

大ホールは昇降式の舞台転換方式とし、反射板の裏に吸音材を設けることで残響時間をコントロールします。

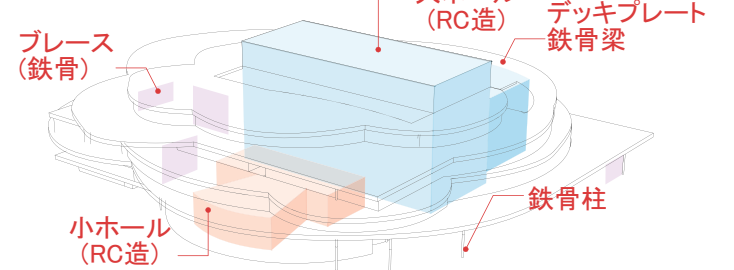


3 時間を越える環境装置

自然エネルギーを活用しつつ、周辺環境も向上するような、長く愛され、活かされる建物を目指します。

3-1 さまざまな大きさの空間と活動を支え、長く建ち続ける建築

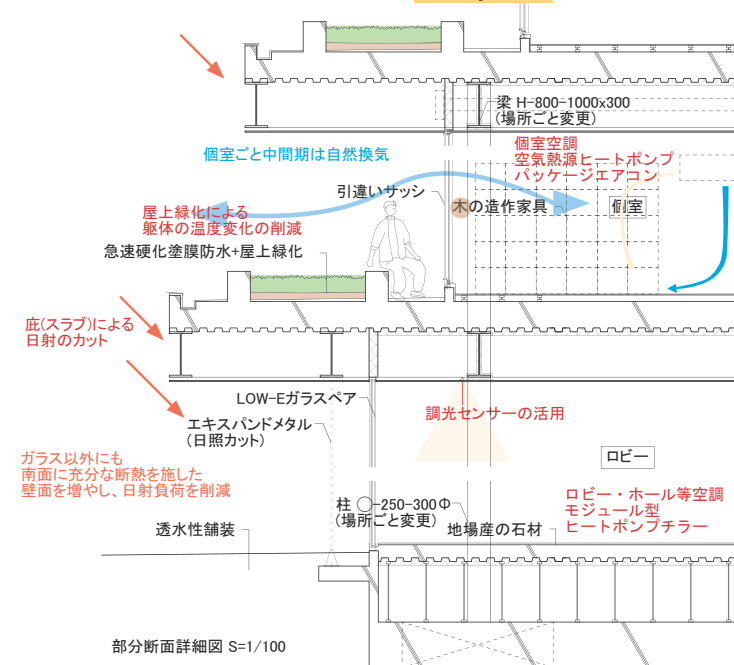
ホールはRC造、それ以外を鉄骨造とし、場所ごとに柱径、梁背を変えることで、それぞれの空間のサイズにあった適切な鉄骨サイズを選択。全体としてしなやかで強い構造体を目指します。



適材適所の鉄骨を選択することで鉄骨の総使用量を削減し、環境に配慮します。現場作業を極力減らし、工場で制作した部材を組み立てることで、工期を短縮し、コスト縮減に配慮します。

3-2 自然エネルギーを取り込みつつ、周辺の環境を調整する、環境装置としての建築

竣工時設計一次エネルギー消費量を50%以下に削減することを目指し、設計中、関係各所との協議を進めながら十分な断熱を確保し、nearly ZEBを実現します。



3-3 設備機器の更新・建物の長寿命化に配慮した計画

主体構造と設備機能を分離した計画とし、機器や配管の更新時に主体構造に干渉せず、容易に更新可能な計画とします。

空調熱源をシンプルにし、装置用スペース、コストを大幅に削減。イニシャル及びランニングコスト、将来改修用コストが縮減される。